

回峰行について



(<https://www.hieizan.or.jp/pursuit> より)

まず、比叡山延暦寺の公式ホームページを見てみよう。[比叡山延暦寺の公式ホームページ](#)には次のように書かれている。すなわち、

『 天台宗は法華一乗の思想ですべての仏教を包含しているので、その修行の種類は多様です。天台の教えに基づく止観をはじめ、伝教大師の心を受け継ぐ十二年籠山行、密教の修法、峰々を巡る回峰行、阿弥陀仏を念ずる常行三昧など、仏教の様々な修行が行なわれています。

相応和尚により開創された回峰行は、文字どおり、比叡山の峰々をぬうように巡って礼拝する修行です。この行は法華経中の常不軽菩薩（じょうふぎょうぼさつ）の精神を具現化したものともいわれます。常不軽菩薩は、出会う人々すべての仏性を礼拝されました。回峰行はこの精神を受け継ぎ、山川草木ことごとくに仏性を見だし、礼拝するものです。回峰行者は、頭には未開の蓮華をかたどった桧笠をいただき、生死を離れた白装束をまとい、八葉蓮華の草鞋をはき、腰には死出紐と降魔の剣をもつ姿をしています。生身の不動

明王の表現とも、また、行が半ばで挫折するときは自ら生命を断つという厳しさを示す死装束ともいわれます。

千日回峰行は7年間かけて行なわれます。1年目から3年目までは、1日に30キロの行程を毎年100日間行じます。定められた礼拝の場所は260箇所以上もあります。4年目と5年目は、同じく30キロをそれぞれ200日。ここまでの700日を満じて、9日間の断食・断水・不眠・不臥の“堂入り”に入り、不動真言を唱えつづけます。

([無動寺回峰道のコース](#))

6年目は、これまでの行程に京都の赤山禅院への往復が加わり、1日約60キロの行程を100日。7年目は200日を巡ります。前半の100日間は“京都大廻り”と呼ばれ、比叡山山中の他、赤山禅院から京都市内を巡礼し、全行程は84キロにもおよびます。最後の100日間は、もとどおり比叡山山中30キロをめぐり満行となるものです。

([京都大廻り巡礼コース](#))』・・・と。

ここに書かれているように、千日回峰行には赤山禅院が重要な位置を占めているので、醉次に赤山禅院の公式ホームページを見ておこう。赤山禅院の公式ホームページには次のように書かれている。すなわち、

『 赤山禅院は、天台宗の数ある修行のなかでも随一の荒行として知られる、千日回峰行と関わりの深い寺です。

千日回峰行は、平安時代、延暦寺の相應和尚（831年～918年、一説に～908年）により開創された、文字どおり、比叡山の峰々をぬうように巡って礼拝する修行です。

法華経のなかの常不軽菩薩(じょうふぎょうぼさつ)の精神を具現化したものといわれており、出会う人々すべての仏性を礼拝された常不軽菩薩の精神を受け継ぎ、回峰行は、山川草木ことごとくに仏性を見だし、礼拝して歩きます。

行者は、頭には未開の蓮華をかたどった松笠をいただき、生死を離れた白装束をまとい、八葉蓮華の草鞋をはき、腰には死出紐と降魔の剣をもつ姿をしています。生身の不動明王の表現とも、また、行が半ばで挫折するときは自ら生命を断つという厳しさを示す死装束ともいわれます。

千日回峰行は7年間かけて行なわれます。

1年目から3年目までは、1日に約30キロの行程を毎年100日間、行じます。行者は定められた260カ所以上のすべてで立ち止まり、礼拝して、峰々を巡ります。

4年目と5年目は、同じく1日30キロを、それぞれ200日間。

ここまでの700日を満じると、“堂入り”をむかえます。比叡山無動寺谷の明王堂に籠もり、9日間、断食・断水・不眠・不臥（食はず、飲まず、眠らず、横にならず）で不動真言を唱えつづけます。その回数は10万と言われ、満行すると阿闍梨と称され、生身の不動明

王になるとされます。

6年目は、それまでの行程に加え、比叡山から雲母坂を下って赤山禅院へ至り、赤山大明神に花を供し、ふたたび比叡山へと上る往復が加わり、1日約60キロとなります。その100日は「赤山苦行」とも呼ばれ、行者の足でも14~15時間を要する厳しい行程です。

7年目は、200日を巡ります。前半の100日間は“京都大廻り”と呼ばれ、比叡山中から赤山禅院、さらに京都市内を巡礼し、全行程は84キロにもおよびます。最後の100日間は、もとどり比叡山中30キロをめぐる、千日の満行をむかえます。

赤山禅院では、千日回峰行を満行した大阿闍梨が住職をつとめ、大阿闍梨により「八千枚大護摩供」「ぜんそく封じ・へちま加持」「珠数供養」をはじめとする数々の加持・祈祷が行われています。』・・・と。

[赤山禅院](#)と千日回峰行との密接な関係については、私の作った「北嶺の人」という紹介文があるので、この際ここに紹介しておく。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/hokureinohito.pdf>

赤山禅院では、千日回峰行を満行した大阿闍梨が住職をつとめ、大阿闍梨により「[八千枚大護摩供](#)」「[ぜんそく封じ・へちま加持](#)」「[珠数供養](#)」をはじめとする数々の加持・祈祷が行われています。

では、赤山禅院の公式ホームページをご覧ください！

<http://www.sekizanzenin.com/kaihogyo.html>

赤山禅院の公式ホームページでは、赤山禅院についで次のような説明をしております。

赤山禅院は、天台宗の数ある修行のなかでも随一の荒行として知られる、千日回峰行と関わりの深い寺です。

千日回峰行は、平安時代、延暦寺の相應和尚（831年～918年、一説に～908年）により開創された、文字どおり、比叡山の峰々をぬうように巡って礼拝する修行です。

法華経のなかの常不軽菩薩(じょうふぎょうぼさつ)の精神を具現化したものといわれており、出会う人々すべての仏性を礼拝された常不軽菩薩の精神を受け継ぎ、回峰行は、山川草木ことごとくに仏性を見いだし、礼拝して歩きます。

行者は、頭には未開の蓮華をかたどった桧笠をいただき、生死を離れた白装束をまとい、八葉蓮華の草鞋をはき、腰には死出紐と降魔の剣をもつ姿をしています。生身の不動明王の表現とも、また、行が半ばで挫折するときは自ら生命を断つという厳しさを示す死装束ともいわれます。

千日回峰行は7年間かけて行なわれます。

1年目から3年目までは、1日に約30キロの行程を毎年100日間、行じます。行者は定められた260カ所以上のすべてで立ち止まり、礼拝して、峰々を巡ります。

4年目と5年目は、同じく1日30キロを、それぞれ200日間。

ここまでの700日を満じると、「**堂入り**」をむかえます。比叡山無動寺谷の明王堂に籠もり、9日間、断食・断水・不眠・不臥（食べず、飲まず、眠らず、横にならず）で不動真言を唱えつづけます。その回数は10万と言われ、満行すると阿闍梨と称され、生身の不動明王になるとされます。



千日回峰行者と赤山苦行をともにした草鞋

6年目は、それまでの行程に加え、比叡山から雲母坂を下って**赤山禅院**へ至り、赤山大明神に花を供し、ふたたび比叡山へと上る往復が加わり、1日約60キロとなります。その100日は「赤山苦行」とも呼ばれ、行者の足でも14~15時間を要する厳しい行程です。

7年目は、200日を巡ります。前半の100日間は「**京都大廻り**」と呼ばれ、比叡山中から**赤山禅院**、さらに京都市内を巡礼し、全行程は84キロにもおよびます。最後の100日間は、もとどおり比叡山中30キロをめぐり、千日の満行をむかえます。

赤山禅院では、千日回峰行を満行した大阿闍梨が住職をつとめ、大阿闍梨により「**八千枚大護摩供**」「**ぜんそく封じ・へちま加持**」「**珠数供養**」をはじめとする数々の加持・祈祷が行われています。

それでは、赤山禅院が千日回峰行と密接な関係にあることをご理解いただくために、次の「北嶺の人」という私のホームページをご覧ください。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/hokureinohito.pdf>

以上で回峰行の概要をご理解いただけたと思うので、その実際をご紹介しよう。まず次のYouTubeをご覧ください。若い修行僧の事例です。

<https://www.youtube.com/watch?v=ZLDLL8g1BHK>

この若い僧が回峰行の修行をしているところは、比叡山の無動寺の明王堂である。



(https://tempsera.at.webry.info/200806/article_17.html による)

[比叡山の無動寺の明王堂の位置は坂本ケーブルの比叡山駅の南にある。](#)

上述したように、千日回峰行は、700日を満じると「堂入り」をむかえる。比叡山無動寺谷の明王堂に籠もり、9日間、断食・断水・不眠・不臥（食わず、飲まず、眠らず、横にならず）で不動真言を唱えつづける。その回数は10万と言われ、満行すると阿闍梨と称され、生身の不動明王になるとされている。その「堂入り」の様子は次の通りである。

<https://www.youtube.com/watch?v=JtHfT4B4QJk>

白洲正子の「私の古寺巡礼」（2000年4月、講談社）でこの「堂入り」について次のように書いている。すなわち、

『 それを紹介する。NHKテレビの「行」という番組では、けわしい山道を、阿修羅のごとく走って歩く回峰から、堂入りを終了するまでのきびしい行を、数ヶ月にわたって克明に映して見せたが、特に感銘をうけたのは、断食に入るまでは、元気のよかった坊さんが、終わった時には憔悴しきって、人々に支えられて出堂する場面であった。9日間の断食といえば、人間にとって極限の苦行である。生死の境を超えて復活した人間は、もはや前の人間とは同じ人間ではない、肉体とともにもろもろの欲情は克服され、仏と一体になる。或いは大自然と同化するといってもいい。実際にも、出堂した時の坊さんは、神々しいまで崇高な姿をしており、まわりに集まった人々は、思わず手を合わせて拝んでいた。』

『 光永澄道師に「ただの人となれ」（1979年5月、山手書房）という著書があるが、その中で「断食行」の体験を実に美しく述べていられる。「断食をしてお堂に籠っていると、先ず聴覚が異常なほど敏感になってくる。不審番の衣ずれのおと、線香の灰が落ちる音などが、ドサッとひびく。中でも野鳥の声は、光永さんの内面に、大きな衝撃を与えた。山を歩いている時は、歩くことが精一杯で、鳥の声は単なる「音」でしかなかった。「間も山に在りながら、その妙音を聴き流していたのである。聞くとは正しくこれではなければならない。身内の心が動かされねばならない。・・・おや、おれが啼いている。そう聴こえたのである。・・・チチと啼けば、こちらの胸の内もチチと啼いている。そう聴こえたのである。そしてその鳥は、（無動寺の）明王堂の屋根の上には止まらず、比叡の峰々へ飛翔して行くであろう。その時こそ、自由に翔べるのである。鳥が光永であり、光永が鳥であった。」』・・・と。

「堂入り」はまさに千日回峰行のハイライトである。凄いの一言に過ぎる。凄い！

以上で千日回峰行の説明を終わるが、最後に「土足参内」について述べておきたい。

京都御所には「土足参内」という習わしがある。「土足参内」とは、**回峰行の創始者・相応和尚(最澄の孫弟子)以来、千年の格式と伝統を誇る習わしである。**由来は、文徳天皇の女御藤原の多賀幾子が物の怪に悩まされた時、京都市中の高僧たちの呪法も一向に効き目なく、師匠円仁のすすめにより、12年籠山中の相応和尚が草鞋履の行者姿で参内し加持したところ、女御の病気は直ちに平癒したと言われている。**千日回峰行を満行した行者のみ許されるもので、京都御所内小御所に土足のまま参内し、国家安穩と玉体安穩を加持奉修する。**「土足参内」は今も行われている。